

優秀賞

「失敗」は「研究」の代名詞

東京都立雪谷高等学校 1年 林 蒼葉

私が学んだのは、「失敗」は「研究」の代名詞になりうるという事です。私は今年の夏、理数研究ラボというものに参加しました。そこではどのような工夫をしたらロケットを正確に飛ばす事が出来るのかを、様々な形や重さの簡易的なロケットを用意し、実験しました。ラボの参加者は6人いましたが、最初は少しの風でバランスを崩してしまったりなどして全員失敗してしまいました。そこで私たちは協力してアイディアを出し合い、ロケットの先端に重りをつけるとバランスを崩しにくくなる事を導き出す事が出来ました。しかしこれを元につくったロケットにもまた問題点が浮かび上がりました。それは復元力が少ないという点です。いくらバランスを崩しにくくしても、もし空中でバランスを崩したら落下してしまうという事です。さらには重りを付けすぎると飛翔距離が短くなってしまうという事もあり、ロケットとしての安定はまだ不十分でした。これらの問題を解決する工夫を再び皆で話し合い、本体の全長を長くする事で一致しました。結果は安定性、復元力を持ち合わせたロケットの作成に成功しました。そのロケットを実際に飛ばすと、姿が見えなくなるくらい遠くに飛ばす事が出来ました。私達は歓喜に震えると同時に、「失敗は無駄ではない」と実感したのである。だがそれだけではだめだ、私たちはその後反省会を開き、多種多様な意見を出しました。その時、私達を指導してくれた先生が言った、「研究は失敗と改善を繰り返した、どんな失敗をしてもそれに対して自分の考えを持つ事が出来れば必ず成功に近づいている。」という言葉は一生忘れられません。

「失敗」は「失う」に「敗け」と書きます。これは「敗けを失う」という、つまり失敗を繰り返して行けば成功につながるという事を暗示していると考えています。

私はこの先どんな失敗をしても、先生の言葉を思い出し努力する立派な研究者になります。